

あなたはどこにいるのか

狐野秀存

はじめに――「アダムよ、おまえはどこにいるのか。」

皆さんのお手元に紙が配られていると思います。それを見ながらお話を進めていきたいと思
います。

「アダムよ、おまえはどこにいるのか。」

〔創世記〕三一九

聖書は新約聖書と旧約聖書があつて、その一番最初に載っているのが「創世記」です。話の
あらすじは聞いておられると思います。キリスト教、旧約ですからユダヤ教になりますが、西
欧の人たちは神様がこの世界をお創りになったと考えたわけです。そして神様が一日、一日、

いろいろな生き物とか自然をおつくりになって、七日目に休まれます。今でも一週間のうち日曜日が休みになるのは、そういうところから来ているわけです。

その神様が人間をお創りになりました。初めの人間です。名前はアダムとエバ（イブ）と言います。男性と女性です。神様がお創りになった人間ですから、純粹無垢で、赤ちゃんのような感じですよ。アダムとエバがいたところをエデンの園と言います。神様がアダムとエバに必要なものを皆与えた楽園でした。ただし神様は二人に一つだけ約束をしました。エデンの園の真ん中に二本の木がはえています。一本は命の木、もう一本は知識の木です。神様は知識の木に成っている果実をさして、「お前たちはあの木の果実を、おいしそうだからといって食べちゃいけないよ」と言います。

ある日、神様が出かけてしまいます。そこへ蛇がやってきて、エバに「この木の実はとってもおいしいんだよ」と声をかけます。エバは「神様からこの木の果実を食べてはいけないと言われたから、私たちは食べられないのです」と言うけれども、蛇は「この木の果実を食べると目が開けて、何でもわかるものになる。いろんなことを知ることができるんだよ」と言います。エバはついつい蛇の誘惑に負けて、木の果実を取って食べてしまいます。とってもおいしい。「な

あなたはどこにいるのか

んでおいしいんでしょ」。傍らにいたアダムに「あなたも食べてみてごらんさい」と勧めます。アダムも一口食べます。頬つべたが落ちるほどおいしい。その時の状況を聖書はこういうふうに記しています。

二人が一緒に食べると、「二人の目は開け、自分たちが裸であることを知って、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした」。そこへ神様がやってきます。アダムとエバは神様との約束を破ったのでこそそと隠れます。二人の姿が見えないので、神様が「アダムよ、お前はどこにいるのか」と問いかけられます。はじめに出したのは、その言葉です。

キリスト教の方は聖書を大事に読んでおられますから深い理解があると思いますが、素人なりに率直に読んで、「創世記」のこの部分の記述のところに、象徴的な、しかも仏教にも通ずるような大切な意味があると思います。一つは、神様から「食べてはいけない」と言われた木の実を食べると、「目が開けてものを知るようになった」という箇所。今まで見えなかったものが見えるようになった。そして善し悪しという価値判断ができるようになったということです。

それを仏教の言葉では「分別心」と言います。知るということは大変すばらしいことです。

今まで知らなかったことを知る。こういうものがあるのか、こんなすばらしいことができるのかと、世界が広がっていくわけです。だけれども、我々がものを知る時には、そうして目が開けるのだけれども、いつもそこに善し悪しという、「これはいい、これはつまらない」と、善悪という形で知ることです。そういう人間のものの知り方、人間の知性を「分別心」と言います。分けて知るという意味です。「分別心」ということは、ものごとを二つに分けて、自分にとっていいもの・悪いもの、好きなもの・嫌いなもの、正しいもの・間違っているものというように、二つに分けて知るといふ知り方を表しています。

神様が帰ってきた時、アダムとエバはこそこそ隠れてしまいました。聖書には「主なる神の顔を避けた」とあります。これは「向日性の喪失」ということです。生きている命というのは、ちょうど、草や木がお日様に向かって伸びていくように、大地から芽を出してお日様に向かって真っ直ぐ伸びていこうとする性質を持っているわけです。そういう命の性質を象徴的に表して「向日性」と呼びます。命が自分に与えられた、その命そのものを本当に力一杯、真っ直ぐに成長させていく。命そのものが持っている力です。

「主の顔を避けた」というのは、二人が神様の前から隠れなければならぬと意識したこと

あなたはどこにいるのか

です。日本の昔風の言い方をすれば、「お天道様のもとを歩けなくなった」わけです。何か自分を恥ずかしいと思つて、隠さなければいけない。そういう心を抱いてしまったのです。「私、ここにいます、これが私ですよ」と言えなくなつて、何か後ろめたい気持ちになつて隠れてしまふ。「向日性の喪失」です。つまり、「創世記」のこの部分は、そういう「生命感覚」「向日性の喪失」ということを象徴的に表していると思います。

聖書はこの後、神が「アダムよ、お前はどこにいるのか」と呼びかけられて、隠れていたアダムとエバが、再び、神の前に出て、神から新たな約束をさせられる。一旦、神の前から自分を隠そうとした者が神から呼ばれてもう一度、神の前に出ていく。そういう出来事から「創世記」以降、新約聖書に至るまでの聖書が始まっているわけです。ここに聖書の構成的なドラマ性があります。

さて、今日は、今申したような聖書のはじめの記述を通して、我々自身はどうなのだろうかということを考えていわけです。「私はクリスチャンじゃないから関係ないわ」というのではなく、ものごとを善し悪しで考えたり、我々の「生命感覚」というものが一体、どうなっているのかということ、皆さん方と一緒にその問題について考えたいと思つています。

ひと昔前になりますが、皆さんが小学生のころだと思えますが、志村けんさんの番組の中に「カラスの勝手でしょ」というのがありました。あの言葉が今日の我々の日常の感覚をよく表現していると思います。皆さん方も多くの人は「カラスの勝手でしょ。どうするか私の勝手じゃないの」と思っているかもしれません。勝手にさせないように、お父さん、お母さん、周りの人たち、大学の先生たちがいろいろ言うてるから「うるさいわね」ということだと思えます。基本的な感覚は「カラスの勝手でしょ」と思っていると思います。そういうことが今日の皆が抱えている問題だし、きちんと考えていかなければならない大事な問題だと思えます。

数年前に亡くなられた方ですが、九州大学に滝沢克己という倫理学の先生がおられました。滝沢先生が晩年に「法則」をいうことをおっしゃっています。たとえば、 $3+4=7$ です。水は高いところから低いところに流れてきます。そういうことについては誰も皆、疑いません。どうしてですか。法則だからですよ。数学的な法則があるわけです。水は高きより低きに流れるというのは引力の法則によってそうなっている。小学生の頃に習っているわけです。ちゃんと見ればその通りになっているから、数学とか物理の法則、自然の法則については誰も疑いません。

あなたはどこにいるのか

ところが、いざ、この私が、人間が生きるということについて法則があるということについては、不思議なことにはほとんどの人が無関心です。それが「カラスの勝手でしょ」です。「人が生きるということ、命を持って生きているということに、法則がある。生きる法則、命の法則があるのだということは考えてもみない」と、滝沢先生は問題提起されています。今日は皆さんに、人間が生きるということは、決して我々が普段思っている自分勝手な事柄だけではないんだということをわかってほしいと思います。

一 「ただびと」となりて

「もう、人間が、着ているもので判断される文明国にはいったのだから。」

（ソーロー『森の生活』神吉三郎・訳）

これはソーローが紹介しているある女性の言葉です。今から一五〇年ほど前のことです。オーストリアのマダム・ブアイフェルという女性が、世界一周旅行、アジアからインド大陸を通って中近東からヨーロッパへ一大旅行をしたわけです。今から一五〇年も前のことですから

大変なことです。JALで「グアムに行ってくるわ」という呑気なことではない。命懸けです。女性が一人、敢然と世界旅行をしたのですから、ヨーロッパ中のジャーナリストの注目の的です。

いよいよプайフェルさんがロシア領に入ってきました。ロシアはヨーロッパの玄関口です。ヨーロッパに帰ってきて、役場に出頭しなければなりません。プайフェルさんは、昨日まではアジアからヨーロッパへの大冒険旅行をしてきたから旅行ルックでした。それが一夜明けてシックなドレスに身を包んで皆の前に現れたのです。そのとき彼女は言いました。「もう、人間が、着ているもので判断される文明国にはいったのだから」。痛烈なるヨーロッパ文明への皮肉です。世界の覇者として後れたアジアやアフリカを次々と植民地化していつて、啓蒙の思想で人類を文明に導こうというヨーロッパ文明そのものへの痛烈なる皮肉です。そういうエピソードを書いたアメリカのソーローという人も、この書物の中で同じようなことを申しています。ヨーロッパ、アメリカのレディ、ジェントルマンたちがどういうものか。「彼は真に尊敬にあたいするものを考えないで、ただ世間で尊敬されているものを考えている。我々は上着やズボンをたくさん知っているが、人間そのものはほんの少数しか知らない」。今

あなたはどこにいるのか

日は何を着ていこうか、今日のパーティにはどう振る舞おうか。そういうことについては明けでも暮れても考えているが、人間そのもの、人であることについてはこれっぽっちも考えたことはないのだと言っています。

ここで出てくる「上着やズボン」「着ているもの」は、我々が着ている着物ですが、単にそれだけではありません。いろんなことを内に含んでいます。我々が身につけているもの、皆さん方は何を身につけていますか。イヤリングだけではなく、目に見えないものもたくさん身につけていますね。まず、学生の場合は、勉強ができるとか、能力、学歴かな。それから財、お金がある。また家柄、血筋というものを着物にする場合もあります。自分の身につけているものの質を高めよう。高い能力、優れた資格、多くの富、できれば皆が羨ましがするような家柄、出自を身につけたい。そういうものが今日の我々が血眼になって取っ替えひっ替え着ている着物かもしれません。

そういうものによって人間を判断してしまう。今から一五〇年前の言葉ですが、じゃ今日の我々がそういう着物、財とか能力とか家柄によって人を見るのではなく、その人を本当にその人として真っ直ぐに見るようになっていくか。どうですか？ 暗澹たるものですね。むしろ一

五〇年経ってますます、「あの人はどういう人か」「どういう資格を持っているか」「どの学校を出たのだろうか」。そのことに振り回されているでしょう。皆さんは今、光華女子大学におられるわけですが、それで「あなたは光華の学生だからこうでしょ」と決めつけられたら困ってしまうでしょう。私というのはもともとと広くて大きいわけです。

私は丸ごとだから、一部の事柄で、「あなたはこうだから、こうなのよ」と断片的に自分を決めつけられるとおかしいと思います。ところが、自分自身のことならわかります。しかし、いざ人のことになると途端にわからなくなってしまうのです。「ああ、あの人はね」「あそこの人だから」という形で見えてしまいます。

自分が人をそのように判断するから逆に友だちから、皆から、自分がどういう風に見られているのが気になるわけです。一片の情報、断片的な事柄で自分を見られたら嫌だと思うにもかかわらず、人の目が気にかかるから、やっぱり能力を高めて財をたくさん持って、いい家柄を獲得したいという思いの中で明け暮れる。とても辛いことです。そういう状況に我々が陥っていることを、よくわかっていくことが必要だと思います。

あなたはどこにいるのか

二 自分の足跡を消さない

「それがどんなにニガい水だったにしろ、自分からその水を飲んだのだった。自分の足跡を、自分で葬るような老獪な真似をするには、わたしは若すぎた。」

（小関智弘「大森界限職人往来」）

小関さんは旋盤工です。鉄の铸件をギーンと削っていく仕事です。今はコンピュータでやっていますが、小関さんたちが働いていた頃の昭和二、三〇年代当時は、大きな機械で職人さんが鉄を削っていく。職人仕事です。小関さんが、何年間か見習いをやって、やがて一人前になって旋盤工として独り立ちした頃です。昭和三〇年過ぎです。皆さん方のお父さんやお母さんが中学生か高校生の頃です。敗戦直後のように、ご飯を食べられなくて困ることはなかったのですが、やっぱり貧しかった。豊かではありませんでした。

それでも景気はまあまあなのです。仕事もあって会社は儲かっているようだ。小関さんも旋盤工として一所懸命働くのですが、だけれども給料が上がらない。家に帰ると貧しい生活です。

だんだん工員たちの間に不満が溜まってきます。「会社は儲かっているのだから、もう少し給料上げてくれよ」。そういう声が上がってくる。とうとうストライキになってしまいます。そうすると、会社もロックアウトで対抗する。会社そのものが工場を閉鎖してしまうわけです。

「お前たちは働かなくてもいい」と。働いている人たちも職場がなくなってしまう。会社も機械を動かさないと儲からない。行きづまり状態です。大体お決まりのコースがあつて、会社側と組合のトップ同士がボス交渉をする。話し合いで決着をつけるわけです。会社側は組合の幹部に「お前たちが給料を上げてくれという気持ちもわからないではない。一応、業績は順調だから若干の給料、賃上げを認めよう。しかし、お前たちのストライキに負けて賃上げをやったというわけにはいかないから、ストライキをしたケジメはきちんとしてもらう」。そういう話になるんです。

つまり、ストライキをした。それに対して組合として責任をとってもらおう。「スケープゴートを出しなさい」ということです。スケープゴートになったのが小関さんなんです。「ロックアウトが解除されたぞ。ストライキが終了した。俺たちの闘争勝利だ。明日から仕事なんだ」と皆が喜びます。小関さんだけが人事課に呼ばれて「小関さん、長い間どうもありがとう」。

あなたはどこにいるのか

君、もう、明日から来なくていいよ」と言われる。解雇通知です。「何をばかなことを言っているんだ」と組合に訴えにいきます。組合の幹部も裏で会社側と話がしてありますから「小関君なあ、皆のために涙を吞んで我慢してくれんか」という話です。

腹わたが煮えくり返る気持ちだけでも、事が決まってしまうから仕方がない。クビになりました。次の会社に就職します。三ヶ月間は見習い工です。もともと腕があるので、一般の工具と同じように働いている。三ヶ月たちました。一緒に入った人は皆、本採用になる。ところが小関さんだけが人事課に呼ばれて「はい、三か月間、ありがとう。今月の給料です」。本採用の辞令が来ないんです。「本採用はどうなんですか」「あなたね、前、あそこの会社に入ってた会社の名前を出されます。ピンとくるわけです。そういうことか。仕方がないからまた次の会社に履歴書を持っていきます。

だんだんそういうことを繰り返していくうちに、後は門前払いです。履歴書を持っていくと、人事課の人は「あのストライキをやったところ。うちはいりません」と撥ねられてしまう。結局、履歴書もいらないうなところでは雇ってくれません。以後ずっと小関さんは、親父さ

んとおかみさんがいるくらいの小さな町工場で働いていきます。

家の人は小関さんに言うんです。「お前、あの会社にいたことなんかいちいち履歴書に書く必要ないじゃないか。機械を動かせば一人前に仕事ができるんだから。馬鹿正直に履歴書に「昭和二十何年、京浜〇〇建設入社、昭和三年同社退社」と書くから、履歴書を見た人は、なんで会社を辞めたんだらうと、当然調べるじゃないか。黙ってりゃわからないんだよ」と言うわけです。

その時のことを小関さんが振り返って書いているのが、この言葉です。「それがどんなにニガい水だったにしろ、自分からその水を飲んだのだった。自分の足跡を、自分で葬るような老獪な真似をするには、わたしは若すぎた」。

確かにクビになった。その会社で旋盤工として働いて腕を磨いて、皆のために、「生活が苦しいよ。何とかしようよ」とストライキをした。結果は不本意に、半ば裏切られた形でクビになったけれども、しかし、決してそれは自分自身、恥じるようなことではない。世間の目から見ると、家族から見ると、「そんなこと黙ってりゃわからないんだから。クビになったなんて人聞きが悪いよ。世間体が悪い」と言うかもしれないけれども、小関さんにとってみれば、そ

あなたはどこにいるのか

の自分を履歴書から抹殺するわけにいかない。たとえどんなにニガい水でも、「よし、ストライキをやろう」と、自分が選びとつたことだ。自分の足跡を自分で消してしまうことはできなかった。律儀に窓口で蹴られても蹴られても履歴書にクビになった会社のことを書いていくわけです。

皆さん方も今、こうして光華女子大学・短期大学に入って、ここで学んで、さらに大きく伸びていかれると思いますが、ひよつとすると、いろんな気持ちの人がおられるかもしれない。光華もひよつとすると第一志望じゃなかったかもしれない。もつと他に行きたいところがあったかもしれない。諸般の事情で、ここにいる人もいるかもしれません。皆さんがこれまで過ごしてきた小学校、中学校、高等学校の間にも、自分でも振り返りたくもないような出来事があったかもしれない。ひどいいじめにあったとか、あのことは思い出したくもないという経験をしたかもしれません。しかし一つひとつの事柄が、どんなに嫌なこと、どんなに不本意なことであっても、そしてまた、今現在の自分を「こんなのは私じゃないんだ」と受け取れなくても、皆さんが今、今日、ここに座っているこの時にまで、一歩、一歩、歩んできた。それが皆さん方自身の足跡でしょう。人が歩いた跡ではない。お父さん、お母さんから「勉強しなさい、

塾へ行きなさい。お稽古としなさい」と言われて、嫌だなと思ってやってきたかもしれないけれども、あなた方が今日まで歩んできた人生の一足、一足、一時、一時が、すべて私の足跡じゃないですか。お父さん、お母さんが代わりに歩いてくれたわけではない。将来もこういう人生が開けてくるかわかません。辛い時、どうしようかとうずくまってしまう時があるかもしれない。しかし、一歩一歩の足跡はまるごと私自身の足跡なのです。

最初に、ご紹介がありましたように、僕は、大谷専修学院という真宗大谷派が経営しているお坊さんの専門の学校にいます。一八歳から七〇歳の方まで幅広い年齢の方がやって来られます。小さい学校です。八〇人もいない。一年間一緒に生活して一緒に学んで真宗のお坊さんになっていく学校です。

入学試験、入学式があります。願書の締切り日が三月三十一日で四月五日が入学試験です。娑婆中、試験が終わっているわけです。それで、いろんな人が来ます。やっと大谷専修学院があったと来る人もいます。その意味では幅広い、面白い学校です。四月五日に試験をして一週間後には入学式です。はじめに皆、それぞれ寮で車座になって自己紹介をします。一人ひとり自分の名前、出身を言います。「京都の生まれです」「大阪です」と言います。この学校にやって

あなたはどこにいるのか

くるまでのことを話してもらいます。一八歳の高校を出てすぐの人は素直です。「あその大学とこの大学を受けたけれども全部だめで、浪人しようかと思ったら、父親に「お前、寺の息子だから一年間、専修学院に行つて資格を取つてこい」と言われたので来ました。何とか大学に行きたいです」と素直に話してくれます。

ところが、なかなか素直になれない二〇歳、二二歳くらいの人も何人かいます。一人ひとり自己紹介の順番が回ってきます。「はい、次の人どうぞ」。その人たちは自分の名前をごそごとと言います。「山田です」「山田君ですか。出身どこですか」「兵庫県です」「今、おいくつですか」「二歳です」。ぶつきらほうです。私の方は職員ですから、入学願書にその人の経歴を記したものを手ともに持っています。全部知っている。あえて聞くんです。「君、二二歳だというけど、どうしてこの学校に来たの？」「寺だから来たんです」「そうだね。ゆくゆくは寺を継ぐのかな」「そんなことはわからねえよ」と投げやりです。「そうか。まだ先の話だから、ゆっくり考えるところとして、今までどうしてたの？」と聞きます。「さる大学に行つたんですが、いろいろありまして」「さる大学って、どこの大学？」「いや、二流ですよ。つまらんとこです」。彼はある大学に行つたけど、アルバイトが忙しかつたのかもしれない。留年して、自分でも

意欲を失ってしまった。家の方から「お前、何してるんだ。ぶらぶらしているなら仕送りを打ち切るぞ。嫌なら寺の息子だから専修学院へ行きなさい」と言われたのかもしれない。大学を中退して、専修学院へ来たのです。

その時、僕は怒るんです。ここはしっかりと言わなければいけないと思って、「君はさる大学と言っているけれども、猿大学か猫大学かしらんけれども、そんな大学はどこにあるんだ。自分の出た大学もきちんと言えない、それを二流とかつまらん学校だと言うのは、君が君自身がつまらんからそう言ってるんだろ」。的を射てますからブスツとして一言も口をききません。「とにかくこうして縁あって、親鸞聖人の教えのもとに浄土真宗、仏教を学びにきたのだから、来年三月に卒業する時には、自分の出た学校を皆の前に胸を張って言えるようになったらいいね」と僕は言うのです。

私どもは真宗の学校で、お坊さんになるために一年間、集中的に勉強しますが、真宗の教え、仏教を学ぶと申しまでも、その学びの内容は、自分がどういう人生を歩んできたのか、どういう学校を出て、今、現在、こういうことで困っているのだということ、率直に自分のことを語ることができる人間になってくれればいいと。それでも「よかったね」と言って卒業証

あなたはどこにいるのか

書を渡したいという学校です。

人によつては、自分でも受け入れられないような、中学校や高校時代があつたかもしれない。決して自分でも望んだわけではない、嫌だなと思つてしまう。こと志と違つてしまった。とても辛いことが起こつて、そこにいることそのものが、焼けたトタンの上にいるように、居たたまれないことがあつたかもしれない。しかし、どんなに自分にとって都合の悪いところ、嫌なところであつても、そこで一年、二年、あるいは結局、中退してしまつたかもしれないけれども、その学生としてその場所に自分の身を置いたのです。それは間違いなく私自身の人生の足跡なんです。あんな高校時代のこととは振り返りたくないということもあるかもしれない。本当に辛い思いをして毎日下を向いて、泣くような三年間だつたかもしれないけど、そこに我慢して、辛い思いを抱えて過ごしてきたのは私なんですよ。

その自分の足跡を「あんなものはつまらない。二流なんだ」と自分で自分を軽蔑して、自分の足跡を消してしまつたら、私というのはどうなるでしょう。私の善し悪しという「分別心」は満足するかもしれませんが。嫌な自分を消してしまつて、見たくない、恥ずかしい、軽蔑されるような自分は亡きものにして、善きものだけを私とする。自分の都合のいいことだけを自分

だとする。それは「分別心」を満足させるかもしれないけど、消された私自身はどうなっているのですか。高校の三年間、あるいはあの大学の二年間、本当にしんどい思いをしてきて、どうしようかと、毎日が息を吸うだけで精一杯だった。そういう私自身がいるわけです。じつと耐えてきた私がいるわけでしょう。その私自身が他ならない私から「お前なんかつまらないんだ、馬鹿みたいだ」と言われてしまったら、なかったことにされてしまったら、その私自身はどうしたらいいのでしょうか。

世間という周りの目から見れば、人の口には戸が立てられませんから、「なんだ、あんた、ああいう学校しか出てなかつたの」「何よ、あんた、あんなことしちゃつたの」「なんだこんなことしかできないのか」といろいろ言われるかもしれない。しかし、どんなに世間の毀誉褒貶があつたとしても、そこで事実、一日、一日を必死に生きてきたのは、この私自身です。その私自身を私が見放してしまつたら、亡きものにしてしまつたら、抹殺してしまつたら、一体この私自身は誰が受け止めてくれるんですか。どんなにつまらない、どんなに嫌な、だらしのない私であつたとしても、その私を見捨てないで、「辛いな、しんどかつたな」と言つて抱きしめてくれるのは私しかないでしょう。私とその私自身を「辛かつたんだね、大変だつたね、

あなたはどこにいるのか

よく我慢したね」と、私が私自身をしつかりと抱きしめて受け止めてあげなければ、一体誰がこの私を救ってくれるんですか。

そういうことが「自分の足跡を消さない」ということなんです。現実には、「そりゃ、そうなんだけど、やっぱりね」というため息、あきらめが出てきます。だからこそそこに、どのような私であっても、自分の足跡を「これが私の足跡なんだ」と、「あの時、あなたは大変だったね」と、善き私も、悪しき私も、そのままに丸ごとを受けとめて、抱きしめてくれる、「新しい私」というものが、我々自身の中から生まれてこなければなりません。

おわりに――いのちみな生きらるべし

だれも皆の中に、ちゃんと我々の内深くにあるんだけど、いまだ、目を覚ましていない、「新しい私」。どんな私をも「イエス。そうです。これが私なんです。つまらないかもしれないけど、能力はあまりないかもしれないけど、一所懸命生きて来たんです」と受け止める「新しい私」の誕生を述べているのが、次の「いのちみな生きらるべし」という言葉です。

あたかも牢獄を逃るるごとく

人はみな

自己の前を逃れんとすれど

世にひとつの大いなる奇蹟あり

われは感ず

いのちみな生きらるべし

(リルケ『時禱詩集』)

嫌な自分、情けない自分、よくない自分が現れる時、一目散にそういう自分から逃れて、見ないようにして、振り捨てたいという気持ちが起こってきます。「あたかも牢獄を逃るるごとく、人はみな、自己の前を逃れようとしている」。だけれども、「世にひとつの大いなる奇蹟あり、われは感ず、いのちみな生きらるべし」と。命そのものが我々に絶え間なく、途切れることなく、繰り返し、「汝、生きよ」と、「つらいだろうね。大変だろうね。だからこそ、胸を張って生きようよ」と、命そのものが我々に呼びかけている。そういう命の促し、生命の呼びかけがあるのだと、リルケは言います。

「われは感ず」、すなわち「生命感覚」です。それを回復することが大事なことだと思いま

ココ

ワタシハイマココニイル

ココガワタシノイマノ場所

ココヨリホカニワタシノ場所ハナカッタ

ハズカシイケレドココガワタシノ場所ダッタ

ココ

ココ

ココ

ココニイルワタシ

ココニイルココガハズカシイケレドワタシノ場所

ダッタ

ココガアカルイ

ココガアカルイ

スバラシクアカルイ

あなたはどこにいるのか

「あなたはどこにいるのか」。単純なことだったですね。「私は今、ここにいる」。もしも皆さん方が、大学での生活を通して、「ああ、私は、ここにいるんだなあ」という「命の感覚」が蘇ってくるのであれば、それでもう十分この大学に在籍した意味があるのだと思います。以上で今日の話を終わります。

——一九九八・一〇・二七——